

将軍の世紀

やまうちまこと 地さ
山内昌之
武蔵野大学特任教授・
東京大学名誉教授

「御不足の御方」と宝曆事件

「それつ回りず」「小便公方」：九代・家重の評判は悪い。心もとない後継者を案じた吉宗がとった行動とは。



(上) 逸話に乏しい徳川家重
(下) 二十歳で前御した徳川天皇



西洋の諺には「松ヤニを味見したハツカネズミ」という言葉があるようだ。ルネサンスの人文学者エラスムスが紹介している。どうやら、「菜に懲りてなますを吹く」に近い意味らしい（宮下志朗訳『エッセー』7）。延享二年（一七四五）十月九日に登城した寺社奉行・大岡越前守忠相は、松ヤニとハツカネズミを連想せずとも、役人なら何事によらず慎重にも慎重を期すべきだと痛感したに違いない。この日、勝手掛老中の松平左近将監乗の名代は、黒書院溜之間にて老中列座の上で「思し召しに応えざる候に付き、御役御免」を申し渡された。罷免したのは、吉宗の隠退に伴い九月一日に九代将軍となつた家重である。「御年頃」になり「御政務御譲り遊ばされ」た家重は『大岡越前守忠相日記』中、延享二年九月朔日条、一ヶ月足らずで人事権を行使したのだ。乗邑は、吉宗政権で享保改革後期の最高実力者であった。「前々より権高に相勤め候様子相聞こえ候に付、先達て諸事慎み相勤め候様にと大御所様より御内意もこれあるところ、その儀無く慎まざるの上、我意を立て取り計らひ候の段不調法の至りに思し召しに叶はず候、大御所様にも右の思し召しに候、これに依つて御役御免なされ

候、差控まかりあるべく候」（『大岡越前守忠相日記』中、延享二年十月九日条）。乗邑の勤めぶりが「権高」と聞こえ、吉宗も内々注意したのに直さず、「我意」のままに物事を進めることに家重や吉宗が共に不快を感じたということだろう。『続藩翰譜』は、「大御所うちうちいましめさせ賜ふとありけれど、とかくあらたむる心もなかりし」と触れる（巻之二七）。

徳川家重ほど十五代の将軍でも逸話に乏しい人物は少ない。理由は、大典に入りびたりなので近習でも将軍に会う者が珍しく、その言行はすこぶる少ないからだ。しかし辻達也氏の『江戸幕府政治史研究』に従って、史料を改めて読み直すと、意外に多彩な逸話が浮かび上がってくる。やがて筆禍事件で処刑される講釈師・馬場文耕によれば、壮年からの病と大酒と女淫を心配した父の肝煎で元文年間には小菅御殿に泊まり鷹狩に励んだこともあるが、いつしか止めてしまった。夜は酒色に耽り目覚めも遅く身体が疲れるので、「それつ回らせ給はず」。そこで「御言葉の御名代」が必要になったと辛辣である。「御側兼帯若年寄格」の大岡出雲守忠光が「御名代」ならぬ「御言葉代」だというのが（『当時珍説要秘録』巻之一）。吉宗の比ではないが、家重も江戸近郊で鷹狩を繰り返したという説もあり、馬場文耕の文章には注意が必

一、御名代ならぬ「御言葉代」

要だ。将軍就任後の鶴御成に限っても、十一年目の宝曆五年（一七五五）までは毎年一度か二度は出かけているからだ（岡崎寛徳『鷹と将軍』）。

忠光は、『徳川の将軍たち』の著者ロシアのアレクサンデル・プラーソルの表現によれば、「音声がよく分節せずはつきり聞き取れない言語活動」（ニエチレノラズデーリナヤ・レチ）を唯一理解できる通訳であった。家重には「小便公方」という芳しくない異称もある。家重は頻尿に苦しんだ。一時間半で行ける距離五キロの上野寛永寺と江戸城との間に二十ヶ所もの便所が造られたというのだ（A.F.Prasol, *Segunp Tokugawa: Dynasty v Hisaki*. Moscow: VKN, 2018. sh.231-233）。さすがにプラーソルの数は多すぎる。実際は三ヶ所だったようだ。宝曆五年正月に寛永寺参詣の帰りに「急に御小便の御心しけり」とて、寺に行列を戻す騒ぎになった。この時から上野御成には、神田橋内、筋違橋門外、上野黒門に仮の「閉所」（便所）をしつらえた。増上寺御成の際も三ヶ所に設けている。また、謡初めで観世太夫が四海波をやりだすと、途中で「急に御小便」で立ち、戻ると観世は四海波をもう一度始める有様だった。家重が世子の元文二年に日枝神社と氷川神社に参じる前に、大岡忠相は「万一御用の節御不自由にこれあるべき由挨拶いたし候」と近

文藝春秋

「新型肺炎」中国と日本の大罪

野村克也と母・沙知代 野村克則 / 林真理子 × 中野信子 「不倫の魔力」 四月号

